

# フランシスコ・ザビエル五百旗頭真先生葬儀ミサ説教 024年

夙川カトリック教会

2024年3月11日

3月7日のちょうどお昼前でした。広島行きの飛行機に搭乗するため、羽田空港の搭乗口で待っていたとき、スマホを開いてネットニュースを見ようとしたら、「五百旗頭真 80歳」という文字が目に入り、なんだろうと思って画面をプッシュしたら、「急性大動脈解離により急死」との知らせでした。びっくりして、息子の薫君に、お祈りいたしますとショート・メールを送りました。その後、ありがとうございますと返信があったので、葬儀ミサの時間と場所を聞いたのでした。「先生が来てくださると、父も母も喜びます」とあったので、旅行中だったのですが、予定をやりくりして参加することにしました。

飛行機や電車のなかで、五百旗頭先生との出会いやいろいろ聞いた話を思い起こしながら、私なりに生前の姿を偲んでおりました。すると薫君からまた連絡がきて、やりとりしているうちに、私に葬儀ミサと説教をお願いしたいとの依頼があって、この日となりました。

五百旗頭先生のことを思い起してみると、伝説の多い方だったなあと思います。ここに参席している方々、家族や親族、そして関わりの深かった方々も、それぞれの場で、伝説として伝えられた話をお持ちだろうと思います。私は三つお話いたします。

ひとつ目は、六甲中学・高校在学中に、一円も授業料を払わなかったという話です。当時の六甲には兄弟が三人同時に在籍すると、三番目は授業料免除になるという制度がありました。五百旗頭先生は8人の兄弟姉妹の6番目で、男子として末っ子でした。二人の兄が在籍していて、五百旗頭先生が入学したとき、三番目ということで授業料が免除になったのです。ところが、上の兄が卒業し、さらに次の兄が卒業したにもかかわらず、なぜか先生は卒業するまで、授業料免除が続いたのだそうです。学校側が忘れていたのかなあとうれしそうにお話なさっていました。

ふたつ目は、六甲高校には、六甲山を縦走するという「強歩会」というものがありました。60数キロにおよぶ長距離を走っても歩いてもいい、とにかく踏

破するという大会です。先生はこの大会に2年連続で優勝したという記録の持ち主です。この記録は長く破られることはありませんでした。最近では30キロくらいのものになり、中1から高2まで5年連続で優勝する者も現れましたが、場所も距離も考え合わせると、忘れ去られる記録ではありません。

みつつ目は、話が長いということです。六甲の卒業生にだいたい共通していて、初代校長の武宮神父の影響なのかも知れませんが、とにかく話が長い。六甲同窓会(伯友会)の会長になられ、入学式や卒業式には同窓会を代表して参加し、祝辞を述べるのですが、校長の話も長い、同窓会会長の話も長い。このような儀式がいつ終わるのか予定も立たない。私は六甲を1999年に去りましたが、一度も入学式や卒業式に参列していません。

私が広島学院で校長をしていたとき、一度先生に講演に来ていただきました。日露戦争100年ということで、お話していただこうと思ったのです。話が長いことは覚悟していましたが、予定の時間を過ぎてしまい、教員や生徒も次にすることがあるので、私は勇気を出して、「先生、もうこの辺り・・・」とお願いしました。先生は私の思いを察してくれ、講演をまとめてくださいました。もっと話が聞きたい生徒は校長室に来なさい、そこで五百旗頭先生に質問したりすることもできるとアナウンスしたところ、かなりの生徒がやってきて、先生は生徒の質問にていねいに応えてくださいました。

先生の話が長くなるというのは、話す材料がたくさんあるからで、意味のないことをぐだぐだ話すというものではありませんでした。歴史的な出来事に関する情報を集め、その時代のコンテクストを踏まえ、的確な評価をすることができるとは思いません。

五百旗頭先生の死は、先生自身にとっても突然でした。神さまが奪って行ったと言ってもいいでしょう。先生はもっともつと提言したいことがあったはずで、今日は奇しくも、3月11日で、東日本大震災から13年目を迎えました。1995年の阪神淡路大震災では、自ら被災され、家は全壊し、ゼミ生のひとりを亡くしています。そのような体験から、「東日本復興構想会議」の議長に推され、震災後の復興のあり様を提言して来られました。同様に、熊本地震が起きた後も、復興のための有識者会議の座長を勤められました。今また、正月明け早々に、能登地震が起こり、その復興のために種々提言をなさりたいと推察いたします。

さらには、ウクライナとロシアとの間の戦争、イスラエルとパレスチナとの間の衝突・抗争など、世界の平和を揺るがす事件が起こっている最中であって、世界の平和のあり様を模索し、提言をなさりたいことは山ほどあったはずで

す。

五百旗頭先生は、決して「国益」という限られた言葉を使って、世界の平和を唱える方ではありませんでした。世界全体を見渡し、ひとりひとりの平和と幸せを実現するという視点から、語られる方でした。それは、五百旗頭先生のお父さま、真司郎氏が、トマス・アクィナスという、カトリック教会にあっては現代でも大切にされている神学者、普通なら、彼の哲学や神学を学ぶのですが、あえてトマスの経済論を専門になさり、「共通善」という概念を日本に紹介したということが根っこにあると思います。

それゆえに、小渕内閣や小泉内閣そして福田内閣のときに、外交ブレーンとしてさまざまな提言・助言を行いました。が、「国益」という狭い範囲でものごとをとらえる発言はしなかったのです。防衛大学の校長に就任したのも、安全保障という問題を、より広い視野で捉える考え方を伝えるためだったと思います。

わたしは、今日、朗読する聖書の箇所として、「ひと粒の麦は、地に落ちて死ななければ、ひと粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」(ヨハネ福音書 12 章 24 節)という言葉を選びました。この言葉はまさに、五百旗頭先生が私たちに伝えたい思いを表しているように思ったからです。五百旗頭先生ご自身がひと粒の麦となりました。そして死ぬことによって、多くの実を結ぶことを期待されているのです。誰がその実を結ぶ担い手となるのでしょうか。それは、五百旗頭先生の教えを受けた者たち、そして受け継いで行こうとする者たちです。幸い、先生の息子の薫君は、そうしたことをすでにしています。門下生たちもそうでしょう。私もそうでありたいと願っています。

皆さん、五百旗頭先生の生前の姿を思い起こしながら、先生に感謝し、そしてこれからの世界の平和と、ひとりひとりの人間の幸せの実現を祈りながら、先生を神さまのもとにお送りいたしましょう。

李 聖一

上智学院カトリック・イエズス会センター長